

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 サメガレイ

学名 *Clidoderma asperrium*

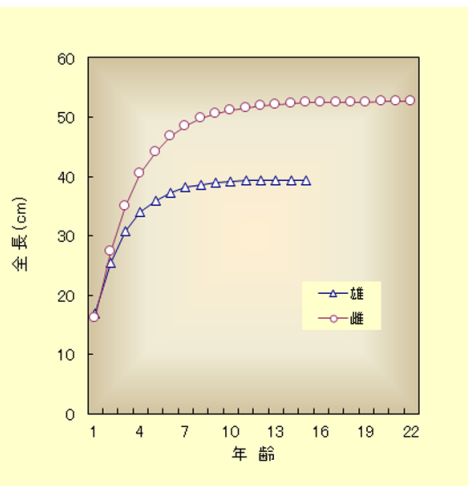
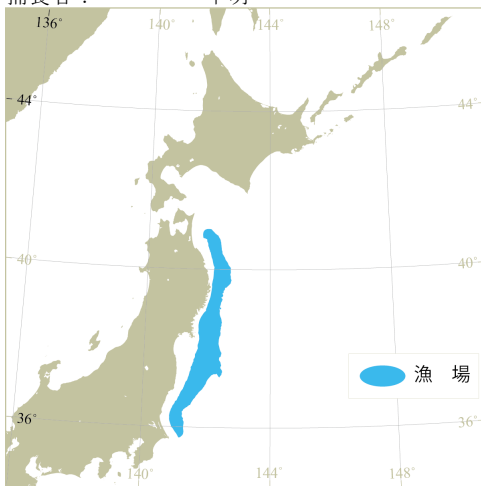
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命： 雄15歳、雌22歳
成熟開始年齢： 雄2歳（一部）、3歳（ほぼ100%）、雌3歳（一部）、4歳（ほぼ100%）
産卵期・産卵場： 1～2月、水深600～900mの深海域
食性： クモヒトデ類
捕食者： 不明

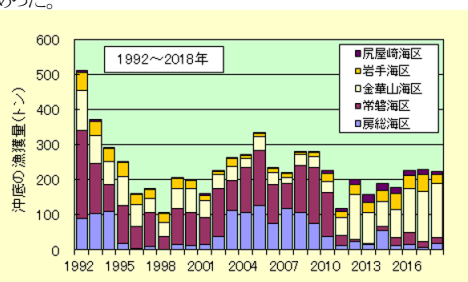
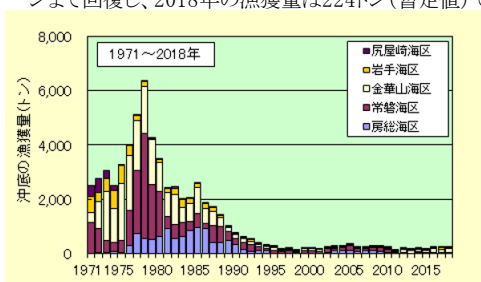


漁業の特徴

主に沖合底びき網(沖底)により漁獲される。小型底びき網や刺網等でも漁獲されるが、これらの漁獲量は極めて少ない。1970年代前半には尻屋崎・岩手海区でも比較的多く漁獲されていたが、1970年代後半以降は漁場が南下し、金華山海区以南(金華山・常磐・房総海区)での漁獲の割合が多くなった。2011年以降は常磐海区、房総海区での漁獲が減少しており、現在は金華山海区での漁獲が多い。

漁獲の動向

2018年の全漁業種による漁獲量は242トンであった。沖底による漁獲量は、1978年の6,329トン进行ピークに減少し、1998年には過去最低の108トンとなった。その後、やや増加し、2002～2010年は219～335トンで推移した。2011年には東日本大震災(震災)の影響で漁獲量は118トンに減少したが、2012年には金華山海区での増加により200トンまで回復し、2018年の漁獲量は224トン(暫定値)であった。



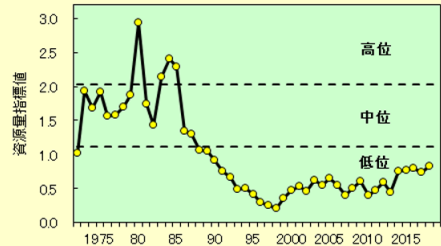
資源評価法

沖底の主要な漁場である金華山海区以南では単一の漁法(トロール)で操業が行われている。金華山海区以南の有漁網数あたり漁獲量(CPUE)を標準化し、CPUEに含まれる月、海域、操業水深などの影響を除去した資源量指標値に基づいて資源状態を評価した。

資源状態

資源量指標値は、1972～1989年には全年の平均以上で推移しており、1980年には最高値を記録した。しかし1990年以降は急激に減少し、1998年には過去最低となった。その後は若干回復し、2014年には前年の1.7倍とやや大きく増加した。その後は2017年まで安定して推移しており、2018年には少し増加がみられた。2014年以降は漁獲物の大部分が大型魚であり、小型魚の加入が少ない状況が続いている。資源水準の区分は、1972～2018年の資源量指標値の最大値と最小値の間を3等分し、上から高位、中位、低位とし、2018年の水準は低位と判断した。直近5年間(2014～2018年)の資源量指標値の推移より動向は横ばいと判断した。





管理方策

資源が低位水準にあるため、漁獲を抑えて資源を増加させることを管理目標とし、2020年ABCを算定した。資源状態には若干の回復がみられるものの、長く低位水準にある本資源の回復を促すためには、局所的に集群する産卵期～索餌期の漁獲を抑えて親魚量を確保する必要がある。

管理基準	Target/Limit	2020年ABC (トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
0.7・Cave3-yr・1.02	Target	140	—	—
	Limit	180	—	—

- Limitは管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量、Targetは資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大が期待される漁獲量
- $ABC_{target} = \alpha \times ABC_{limit}$ とし、係数 α には標準値0.8を用いた
- ABC算定のための基本規則2-1)により、 $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ で計算した
- δ_1 はCaveを用いる場合の低位水準の推奨値である0.7とした
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算し、kは係数(標準値の1.0)、b(0.0148)とl(0.782)は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2016～2018年))である
- Cave3-yrは2016～2018年の平均漁獲量
- ABCは10トン未満を四捨五入した値

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は横ばい
- 2014年以降は漁獲物の大部分が大型魚であり、小型魚の加入が少ない状況が続いている

管理方策のまとめ

- 漁獲を抑えて資源を増加させることを管理目標として2020年ABCを算定した
- 長く低位水準にある本資源の回復を促すためには、局所的に集群する産卵期～索餌期の漁獲を抑えて親魚量を確保する必要がある

執筆者: 鈴木勇人・成松庸二・柴田泰宙・森川英祐・時岡 駿・永尾次郎

資源評価は毎年更新されます。